人から人へ愛のプレゼント

設立20周年記念

やまぐち移植医療通信

特集号
平成25年10月26日

山口市滝町1-1（山口県地域医療推進室内）　TEL 083（932）0743　FAX 083（933）2939
URL　http://www.y-ishoku.org
E-mail　bank2@crocus.ocn.ne.jp

発行者：公益財団法人やまぐち移植医療推進財団

公益財団法人やまぐち移植医療推進財団設立20周年記念事業

日時　平成25年10月26日（土）午後１時
場所　山口県総合保健会館多目的ホール

○ 「献眼・献腎合同慰霊式」次第

1．開　会
1．理事長挨拶　　やまぐち移植医療推進財団　濱　本　　史　明
1．黙とう
1．追悼の辞
　山口県知事　　山　本　　繁太郎
　ライオンズ国際協会３３６－Ｄ地区ガバナー　　坂　根　　勝
1．代表献花
　やまぐち移植医療推進財団理事長　　濱　本　　史　明
　遺族代表　　牛　尾　　清　勝
　山口県知事　　山　本　　繁太郎
　ライオンズ国際協会３３６－Ｄ地区ガバナー　　坂　根　　勝
　山口大学医学部附属病院院長　　田　口　　敏　彦
　山口県医師会会長　　小　田　　悦　郎
　山口県眼科医会会長　　小　林　　元　巳
　山口県腎友会理事長　　吉　村　　隆
　角膜移植者代表　　高　橋　　作之助
　腎臓移植者代表　　村　田　　三枝子
1．参列者献花
1．挨拶
　遺族代表　　名和田　　新
　移植者代表　　松　下　　正　信

○ 感謝状贈呈式

1．感謝状贈呈
　名和田　勝　　山陽小野田市
　新南陽若山ライオンズクラブ　　周　南　市
　メスキュード医療安全基金　　山陽小野田市
　山口大学医学部附属病院眼科　　宇　部　市
　山口県腎臓移植のための腎臓摘出チーム　　宇　部　市

○ 記念

1．題目「日本および山口県における腎移植の現況」
　講師　山口大学医学部附属病院泌尿器科医師　　藤　川　　公　樹
1．題目「閉ざされた光を取り戻す～私たちにできること～」
　講師　山口大学医学部附属病院眼科医師　　森　重　　直　行
1．閉会

献眼・献腎合同慰霊式　挨拶

公益財団法人やまぐち移植医療推進財団
理事長　**濱本　史明**

本日、献眼･献腎を賜りました多くのご遺族並びにご来賓の皆様方にご臨席いただき、献眼･献腎合同慰霊式を挙行するに当たり、謹んで哀悼のご挨拶を申し上げます。

これまでに山口県内で献眼並びに献腎を賜りました254柱の御霊に、「何人に対しても見返りを求めない」その崇高な人類愛に満ちた善意に敬意の誠を捧げます。また、その尊いご遺志を受けて移植を受けられた多くの方々が光を得て、あるいは人工透析から解放され、健康な日常生活を送っておられますことをここにご報告申し上げます。

そして、強い絆で結ばれた最愛のご家族を亡くされ、ご悲嘆の最中にあられたにもかかわらず、故人の尊いご遺志を尊重され、角膜並びに腎臓の提供にご理解を示していただいたご遺族の皆様に心から感謝申し上げます。

当財団は、平成５年に設立されました財団法人やまぐち角膜・腎臓等複合バンクを前進とし、設立前から今日まで、県・市町村・ライオンズクラブ・医療関係者を始め、多くの方々のご支援・ご協力を賜りながら活動を続けて参り、今年で節目の20年を迎えましたことは誠に感謝の念に絶えません。

視力を失い、また、腎機能不全により移植以外に回復の見込みがない中で不自由な生活を余儀なくされている多くの患者にとって、当財団の活動は大きな希望になっています。移植を受けられたことで喜びに満ちあふれた生活を送られているという事実は、これからの人生に可能性や希望を感じさせるに余りあると云えましょう。

角膜や腎臓などの臓器移植医療につきましては、平成22年７月に改正臓器移植法が施行されるなど、移植環境が整備されたことから、ここ数年で山口県内においても人々の関心が高まりつつありますことを実感している次第です。こうした移植医療社会の変革を社会情勢に照らし合わせながら　さらに、適切に推進していくためにも、県内における移植医療の唯一の推進組織である当財団が担う役割は大変大きいものがあると考えます。

また、移植医療は提供者はもとより社会の理解と支援があって成り立つ医療でもあります。こうしたことから、今後もここにお集まりの行政関係やライオンズクラブ、医療関係の方々を始め、多くの関係者の皆様のご支援・ご協力を賜りながら移植医療の推進のために努力を重ねてまいる所存でございますことを、固くお約束いたします。

最後になりましたが、献眼・献腎という素晴らしい贈り物をされた故人に、改めて敬意と感謝を申し上げますとともに心からご冥福をお祈りいたします。

献眼・献腎合同慰霊式　追悼の辞

山口県知事　山本　繁太郎

本日、献眼・献腎合同慰霊式が厳粛に執り行われるにあたり、謹んで追悼の誠を捧げます。

御霊の善意によって、視覚障害や腎機能障害に苦しんでおられる方々が健康を取り戻され、社会生活に復帰されていることに思いを寄せますとき、御霊の尊い御意思と、御遺族の皆様の深い人間愛に対しまして、深甚なる敬意と感謝を捧げる次第でございます。

一方、依然として、薬や手術では治せない、臓器移植でしか治療できない重い病気により、多くの方々が日々の健康に悩まれながら、不自由な生活を余儀なくされております。

移植医療は、皆様の善意があって初めて成り立つ医療でありますことから、県民の皆様の十分なご理解とご協力が重要であると考えているところです。

このため、県では、多くの県民の方々に臓器提供の意思表示を行っていただくための普及啓発や、臓器提供発生時の院内調整を行う院内コーディネーターの設置促進などに取り組むこととしています。

こうした中、設立20周年を迎えられました公益財団法人やまぐち移植医療推進財団におかれましては、これまで、角膜を必要とする方に光を取り戻す橋渡しをするアイバンク事業や、病気等によって臓器が機能しなくなった方に、健康な臓器を提供する移植医療の普及啓発に意欲的に取り組まれるなど、移植医療を推進する中心として地域医療の充実に多大な御尽力をいただいているところです。

県といたしましては、御霊の御心を受け継ぎ、角膜・腎臓移植の普及に向けた取組を進めておられます公益財団法人やまぐち移植医療推進財団をはじめ、関係の皆様と連携し、献眼・献腎の輪が県民に大きく広がり、定着するよう、全力を尽くしてまいることをお誓い申し上げます。

ここに、御霊のご遺徳をしのび、とこしえに安らかなご冥福をお祈り申し上げますとともに、御遺族の皆様と、関係の皆様方のご健勝、ご多幸を心から祈念いたしまして、追悼の言葉とさせていただきます。

献眼・献腎合同慰霊式　追悼の辞

ライオンズクラブ国際協会336－D地区
ガバナー　**坂根　勝**

本日は、献眼、献腎を賜りました２５４柱の御霊をお迎えし、献眼・献腎合同慰霊式を執り行われるにあたり、謹んで追悼の言葉を捧げます。

私達ライオンズクラブは、「地域社会の生活・文化・福祉及び公徳心の向上に積極的に関心を示し、国際的･民主的社会の発展を目指す」ことを掲げ、青少年育成･環境保全・福祉等の幅広い社会奉仕活動を展開しております。

とりわけ、献眼運動につきましては、公益財団法人やまぐち移植医療推進財団の前身であります財団法人やまぐち角膜・腎臓等複合バンクが平成５年に設立される以前より県内での取り組みを始めて以来、多くの県民の皆様方にご理解・ご協力をいただいて、運動を推進してきているところでございますとともに、公益財団法人やまぐち移植医療推進財団が設立20年の節目を迎えられましたことに深い感慨を覚える次第です。

献眼・献腎等の臓器提供に当たっては、「人が人として生きるために、思いやりの心を持って、他の人とつながり合い、互いに助け合うこと。」この相互扶助の精神があってこそと成り立っているものと考えます。

病気で困っている方のためにという崇高な人類愛の発露から善意の精神により、角膜或いは腎臓を捧げられました御霊は勿論ですが、実際にお身内の方を亡くされ、悲嘆にくれておられる中で、亡くなられた故人ご本人の尊い御遺志を尊重されたご遺族の方々に敬意を表したいと存じます。

献眼・献腎は「人として最後の素晴らしい贈り物」と言われていますが、このような人類愛に満ちた行いを私達ライオンズクラブ会員一人一人が模範として継承し、社会運動として広がるよう、これからも鋭意、活動を続けていく所存でございます。

最後に、献眼・献腎をされました御霊を前にして、見返りを求めない素晴らしい善行に対しまして、改めて敬意と感謝を申し上げ、謹んで追悼の言葉といたします。

挨拶 遺族を代表して

九州大学名誉教授　名和田　新

遺族を代表して、一言挨拶をさせて頂きます。

父は1998年に、母は2012年に、それぞれ私達家族の見守る中で献眼をさせて頂きました。

父は山口県の献眼運動を中心となって進めて来ました。

その取組みにつきましては、私の妹の大坪京子が、やまぐち移植医療推進財団20周年記念誌に{父・名和田　豊の献眼運動を想う}と題して、山口県の献眼運動の歴史を、極めて詳細に、思いを込めて書いておりますので、是非読んで頂きたいと思います。

父は山陽町厚狭の開業医として、県会議員として、そしてライオンズクラブのガバナーとして、地域に貢献して来ました。

父は特に医師としての使命を強く持っていました。

1982年75歳の高齢で山口・島根のライオンズ国際クラブのガバナーに選ばれると、この地域で、その取組みが遅れていた献眼運動を始めるため、多くの皆様と力を合わせて、献眼運動の使命と、その運動の永続性を唱え、更に愛の光を出版し、その啓蒙に努めて来ました。

山口大学医学部眼科教室の支援を得て、山口県庁に働きかけ、1993年アイバンクが設立されました。　1996年に献眼慰霊祭が山陽町で開催されました。

山陽町は山口県における献眼運動の発祥の地として、ＪＲ厚狭駅前に献眼をたたえる碑が建てらえています。

父が人生最後の奉仕として頑張って来ました事が、ライオンズの会員の皆様を初めとする献眼運動を推進する皆様の奉仕の積み重ねにより、やまぐち移植医療推進財団が20周年を迎えられました事に、父は非常に喜んでいると思います。

私は父の遺志を継ぎ、九州大学医学部で内科医として社会貢献をして来ました。

我が国で昨年、献眼をされた方は約900人で、移植を受ければ、光を取り戻す事が出来る患者さんは5，000人から1万人いると、言われています。

献眼は圧倒的に不足しています。

どうぞ、この活動が末永く続き、多くの方に愛の光を与える事が出来ます事を、お祈りして、挨拶にかえさせて頂きます。

移植者代表挨拶

愛と勇気と希望

山口市　松下　正信

まず、私たちに愛と勇気と希望を下さった皆様に、心からお礼を申し上げます。

私は60歳の○年○月に腎臓移植を受けました。私は27歳のとき慢性腎炎と診断され治療を続けてきましたが、今から20年前の○○歳のときに夜間の人工透析を始めました。職場は○年○月末で定年退職し、透析を始めて20年たった○○月に移植をしていただき、現在、元気一杯とまでは言い切れませんが透析生活を離れ日常生活を送っています。

実は、私は今から８年位前に妻の腎臓を移植してもらいましたが、超急性拒絶反応が起こり10日間位で腎臓を取り出しました。この間、尿はほとんど出ず非常に苦しい入院生活でした。妻には今でも本当に申し訳ない気持ちで一杯です。

透析開始から20年経ち、年齢も○○歳になり、また最初の移植がうまくいかなかったこともあり、移植には非常に躊躇しましたが先生の後押しがあり、最後のチャンスと思い移植を受けました。

まだ通院生活は続きますが、腎臓を下さった方の志を無にしないよう長く腎臓とともに生きていき、社会に貢献したいと思います。

また、本日はこのような慰霊式を設けていただいた公益財団法人やまぐち移植医療推進財団の関係者の皆様に厚くお礼を申し上げますとともに、引き続き私達患者の力になってくださいますよう切にお願い申し上げます。

最後に、私に腎臓を下さり、お亡くなりになった方の崇高な志に対し敬意を表しますとともに、心からご冥福をお祈り申し上げます。

財団法人やまぐち角膜・腎臓等複合バンク設立にご尽力を賜わった方への回想

父・名和田豊の献眼運動に想う

故名和田豊・治子遺族（長女）　大坪京子

父・名和田豊は1998年3月に、母・名和田治子は2012年6月に、夫々、私たち家族の見守る中、献眼致しました。この「人生最後の奉仕」は幾人かの方々に「愛の光」をお届けできたようで、本当によかったと思っております。大変身勝手ですが、私たち遺族はこの父母の遺徳善により「心安まる」思いを授かったのです。

今回、機会を頂いたので、献眼奉仕に至るまでに、父母が、多くの人々と共にひたむきに突き進んだ、献眼活動の初めの頃の事々をご紹介したいと思います。

父母の献眼運動は、公式には、1982年に始まります。この年、75歳の父はライオンズ国際クラブ336-D地区（山口・島根二県）ガバナーに選ばれると、かねてから気懸かりだった、「献眼運動」を地区方針として掲げて１年間の、しかし、その後も終わらせてはならないと云い続けた、永続的な、活動を父は始めたのです。

献眼角膜移植運動の様な社会活動は一人では出来ません。多くの関係者の賛同・支援と協力体制が要ります。また、新しい事を始める時はいつもそうですが、推進者の皆さんは「知識ゼロ・ノウハウゼロ」からの出発が常だと云えましょう。

1982年時点で、山口県・島根県の献眼運動は未成熟で、全国的に見て約10年の後進県でしたから、早急な立ち上げには、運動推進のノウハウを先行する献眼運動集団に教わるのがよかったのでしょう。

1982年3月、静岡県小山町（当時の人口2万5千人）では、10年間の献眼者が102名を超え、献眼者百霊祭を開催するとのニュースが「ライオンズ」誌に載りました。偶々、これを読んだ父は、すぐに小山ライオンズクラブに手紙を出し、その功績を讃えると共に、後進地区への指導を依頼します。すると、当時の小山LC斉藤寿義会長は「眼球銀行（アイバンク）が鍵となるから、運動の実質的な実行のためには、是非とも厚生省認可の読売事業団眼球銀行に依頼されると良い」とお教え下さり、小山LC事務局の尾登靖子さんも色々と資料を下さったそうです。

眼球銀行（アイバンク）がなければ、献眼運動は出来ず、しかも、このアイバンク設立には金と時間が要ると云うのでした。読売事業団の後ろ盾があれば、自前のアイバンクなしでも、直ちに運動が始められます。今は各県毎にアイバンクが出来ましたが、その頃は読売事業団の眼球銀行が唯一の頼りでしたから、その先行的な功績は末永く高く評価されなければならないでしょう。

「読売光と愛の事業団・眼球銀行」に父が早速に出したお願いの手紙へは、小竹昭三事務局長からは「非常に難しい仕事だが、協力を惜しまないので、頑張って頂きたい。既に、336-C地区（広島県）の眼球銀行も引き受けているので、その献眼運動指導者を紹介する」とのご返事を頂きました。

4・5月は、7月に愈々発足するキャビネットの体制作り・気持ち合わせの時期でした。キャビネット研修会やら幹事打合せ会が続きます。心が通じ、目標に向けて共同体制がとれなければ、どのような高邁な目標も「絵に描いた餅」です。色々な会合を通して、ガバナーに内定していた父は、運動の意義を説き、行動への意気を高める地ならしをしたようです。

5月には、念願の先進活動家と会え、得るところ大だったようです。境港市でライオンズクラブの中国地方複合大会の席で、読売事業団小竹事務局長が紹介してくれた、広島（336-C）の献眼運動指導者のお二人と会えた由です。末田尚

医師（336-C地区献眼特別委員会委員長・加計LC）と堀江敬三医師（庄原LC）から、献眼運動の実践について聞き及ぶにつれ、「生涯忘れられない思い出の一つであり、336-D地区に開眼の愛の灯火が燃え上がる原動力の一つとなった」（「愛の光を・・・（献眼への奉仕の記録）」名和田豊著1985年3月、3頁）と父は書いております。

6月の１ヶ月、父・名和田豊ガバナー（内定者）の要請と方針を受けて、当時、献眼特別委員長に就かれた故山中健三氏（下松LC）は「アイバンク（眼球銀行）のイロハから学び、ライオンズ会員に配布する献眼運動の実務手引書の作成に追われた日々だった」と書いておられます。参加者が運動の成果を挙げるには、献眼運動の使命を自覚する事が前提です。次いで、運動のやり方を理解することです。それがこの手引書のねらいでした。

島根県側の新設ライオンズクラブの新会員で、336-D地区視力聴力委員長となられた吉岡英之氏もゼロからのスタートでした。島根医大眼科教室にアイバンク協力病院の中心になって頂き、更に、眼科医会、眼球摘出協力病院を依頼して回る、などの「献眼運動体制」作りを会員と手分けして、或いは、一緒になって進めた、と云う事でした。

山口県側も同様でした。故原誠人氏は「アイバンクの知識は何もなく、担当する責任の重大さと不安の中の出発でした。」と書き遺されています。「摘出から移植までを24時間体制でお引き受けしましょう」と山口大学眼科学教室の小林俊策教授（当時）が快諾された時の感激も書き遺されています。24時間体制で摘出医派遣を請負う事は大変なことです。その大変さを推し量れる人が感激するのです。

7月、愈6ヶ月の準備期間を終えた父・名和田豊が正式にガバナーに就任すると、献眼登録運動が始まりました。名和田の活動基本方針は次の様なものでした。

1　今後10年でアイバンクを山口・島根の二県に創ることを目標とし、それまでは、読売事業団眼球銀行に協力を仰いで、献眼運動を行う。

2　山口大学と島根医科大学の眼科教室に献眼協力病院の中心となってもらう。

3　医療関係のキーマン（県衛生部・医師会・特に眼科医会・病院・診療所）へは、積極的に訪問や手紙の送付により働きかける。

4　ライオンズクラブ会員とその家族に呼びかけ、広報・献眼登録活動を行い、次いで、婦人会・老人会に呼びかけの輪を広げる。

5　地域内で献眼研修会を開く一方、中国地方合同研修会にも参加して、参加会員が他地区の運動推進状況から刺激を受けるようにする。

6　献眼登録と眼球摘出・角膜移植の成果を時期を区切って確認しつつ、次第に盛り上げる。

7　献眼強制は絶対あってはならないが、献眼行為は大きく顕彰・表彰し、その意義を広報する。

8　献眼運動特別委員会組織化の基本ポイントは、「委員の1年交替制」が献眼運動推進の断絶をもたらさない様にすること、である。そこで、前任（当期の献眼特別委員）と後任（次期

の献眼特別委員)はペアで運動し、オーバーラップさせつつ任期をずらせて、献眼推進活動をする方式とする。

8月から12月までは、ガバナーも推進員も、この方針に基づく献眼運動の広報活動に明け暮れました。当時、336-D地区は100クラブ、約5千人のライオンズ会員から構成され、その方々とご家族のご協力・ご活動を受けて、献眼登録運動が始まったのです。

父のガバナー任期は、1982年7月から1983年6月までの1年間でしたので、時間を限ればその成果は知れたものでしょう。どのような運動も、その緒戦の成果はささやかなものでしかないのです。それでも、その1年間の成果は、336-D地区での献眼登録者数は1,561人、献眼者数は4件となって顕れました。人は、運動への熱意と密度がもたらした集積を読み取ってくれたようです。

それから17年後、1999年3月の山口県の献眼登録者数は20,621人（＊)、2013年3月の登録者数は26,126人、に達しております。また、2013年までの最近3年間の山口県内の角膜提供者数は6、14、6人と推移しており、1982年度の献眼者数4件と対比する時、これらの数字は、その後の運動の推進状況を示している、と云えましょう。

＊1999年3月、島根県を含めた、336-D地区全体では34,315人です。残念ながら、2013年の島根県データは手元になく、336-D地区総数はここに示せません。お許し下さい。

運動の「永続・不滅」を唱え続けていた父は、その後も、336-D地区名誉顧問会議長という立場を頂き、自らは全国アイバンク推進協議会の個人会員に登録して、運動を続けました。また、「愛の光を・・献眼への奉仕の記録」を自費出版して心ある人々に配布していました。

父の関心事は、献眼登録運動の推進体制が出来た後は、取り分け、アイバンク設立であったようです。これこそが運動永続を支える、と見たからでしょう。だが、1983年からの1年間、山口県アイバンク推進協議会の進展はなく、会合開催も滞っていました。

1984年11月、父・名和田は、既に第1線からは引いていたものの、献眼運動幹部の皆さんをお誘いして、山口県庁を訪問し、副知事・県衛生部長などの要職の方々に献眼運動の現勢とアイバンクの意義とを説明申し上げたのです。これを受けて、山口県は1985年度予算にアイバンク運動推進費70万円を計上してくれました。その後のアイバンク設立への動きについては何も知らされないまま10年間が過ぎた1995年初頭、「山口県のアイバンクが県主導で本年中に設立の見通しとなった」との報道がありました。

1995年11月、「やまぐち角膜・腎複合バンク」（全国で48番目）が、1998年2月、「しまねまごころバンク」（全国で51番目）が設立されました。当初、設立には10年かかると云われていたのが、1982年から13～16年を要したのです。1985年からの10年の紆余曲折は知る由もありませんが、兎に角、宿願の支柱とも云えるバンクは出来たのです。ライオンズクラブ国際協会336-D地区は1982年以来13年間に積み立ててきたアイバンク設立基金3000万円強をここに拠出・提供したと云う事です。

このアイバンク設立と共に、百霊祭–献眼慰霊祭–を執り行い、同時に、それを献眼の広報活動の一助としたい、とする動きが高まります。父の後にガバナーと成られた故山中健三氏は病床で「百霊祭の実現を頼む」と云われて冥土に旅立たれたそうです。父も、1994年から1995年にかけて、生死の淵を彷徨った後、奇跡的に腎不全から快復し、その直後でしたが、ライオンズ名誉顧問会に出席し、「献眼慰霊祭を執り行って、更なる前進を図ろうではありませんか」と訴えたと云います。名誉顧問会は満場一致でこれを採決し、時の336-D地区の古谷篤生ガバナー（防府キャビネット）が献眼慰霊祭を主催される事となったの

です。

1996年2月、336-D地区合同献眼慰霊祭は、山陽町文化会館で多くの関係者（献眼者ご遺族、献眼運動に関わる県・バンク財団・医学会・ライオンズ会員）をご招待して執り行われました。主催関係者の計らいで、その慰霊祭は、336-D地区の献眼運動発祥の地として、この山陽町（現・山陽小野田市）が選ばれた、と聞き及んでいます。88才となっていた父・名和田豊も招かれてご挨拶する機会を頂きました。

その時、除幕式を執り行った「献眼をたたえる碑」がJR厚狭駅前広場に立ち、2012年には、山陽LC設立50周年記念に「献眼モニュメント」が加わり、厚狭駅前は「献眼をたたえる碑」「献眼モニュメント」「慈光」と三セットが揃っています。また、埴生糸根公園（山陽小野田市）には、献眼第1号となった故佐能秀幸君の「献眼献腎をたたえる碑」が立てられています。

初めにご紹介した様に、父はこの慰霊祭の2年後に、母は21年後に、夫々人生最後のご奉仕（献眼）をして、冥土に旅立ったのですが、近くに居た遺族として、目にし、耳に聞いた事の中で印象深い、二つの話を最後にご紹介させて下さい。

第一話は「献眼をたたえる碑」にまつわる話です。

盛岡の斉藤なみさんは、長門市に「金子みすず記念館」を訪ねようとして、遠路はるばる山陽新幹線の厚狭駅に降りたのですが、長門行きの美祢線の出発までは1時間もあり、為す術なく駅前で過ごされていた時、「献眼をたたえる碑」に気づいたのでした。そこには、「献眼により開眼した喜びの詩」が刻まれていたのです。しかも、それは自分が住む岩手の女性が作詞したもの。斉藤さんがこの詩との出会いの感動を地元の岩手日報に投稿すると、作詞者は岩手県花巻市在住の方だと判りました。やがて、岩手のライオンズクラブは訪問団を山陽LCに送り、交流を深め、改めて献眼の意義を確認し合った、と云います。作詞者・菊池歌寿さんも、開眼より50年、勿論、その訪問団の一員としてに参加され、斉藤さんと菊池さんとの対面など、一連の話は、それぞれの地元新聞が報じ、人々の献眼への関心を高めてくれたとのことです。「感動は人を動かす」のだとつくづく思います。その詩をご紹介しましょう。

ほんとうにありがとう
うれしかったのは十二才のとき、
「角膜の手術をすれば、見えるようになる」
と言われた事
そして手術後、はじめて母の顔が見えたとき
涙がとまりませんでした
先生は、それはうれし涙だよ、と
病院の窓から一日中　盛岡の街なみを見ていました
それは何もかも光り輝いて
紅葉も青い空も、雲も、街ゆく人たちも
すべてが新しい感動でした
眼をくださった方　先生
ほんとうにありがとうございました
日本ではじめて角膜の移植を受けた
菊池歌寿さん

第二話は、小山ライオンズクラブ（静岡県小山町人口19,924人、40会員）にお伺いして、改めて知った小山の献眼活動です。小山LCは、かって、父・名和田豊が336-D地区ガバナーとして献眼運動を立ち上げる時、大変お世話になった先進LCで、しかも、その町勢と云い、クラブ規模と云い、山陽LCの置かれた状況と似ているのです。

小山LCが、献眼運動30周年に当たる1999年10月に、富士霊園の小高い丘に献眼慰霊碑を作り七百霊・慰霊祭が挙行された時、私は亡き父の名代として献眼碑に合掌したのです。

小山LCは、その「献眼」奉仕活動が、既に1985年、国際的に広く知られるところとなり、ライオンズクラブ国際協会会長から「トップテン奉仕事業賞」を受賞しています。

1969年に活動開始して後、小山LCは、1986年に二百霊祭、1990年に三百霊祭、1996年に五百霊祭、1999年に七百霊祭、と恐るべき勢いで実績を積み上げ続けました。

この文をお読み下さる方に特にご注意願いたいのは、この話は、人口僅か2万人の町での献眼運動の実勢だ、と云う事です。これだけの献眼実績を生み出すエネルギーが並大抵ではない事を、献眼活動に身を入れておられる方々ならば、身近のデータと比較されてご理解下さるでしょう。

1999年の訪問時、私は「尊い献眼者ご芳名簿」

をお借りして、これまでの献眼者全てが献眼年月順・地区別に整理されている様子を目にしました。

1年間の活動実績も拝見しました。この年、静岡県（334-C地区）全体では、48ライオンズクラブが活動し、186献眼を受けた由でした。186献眼自体が献眼運動に相当熱心な県（地区）だと思わせる数字ですが、その中でも、小山LCは35献眼（19%）をカバーして、静岡県内でも顕著な実績を上げていたのでした。

多分、年月を経たらこの趨勢は変わっているだろう、と思いまして、2013年9月、小山LCに電話でお問い合わせしたところ、事務局の森さんは「これまでの累計実績として、1435霊の献眼をお世話し、来年2014年11月には、小山LC結成50周年と千五百霊・慰霊祭の挙行を計画中」だとご紹介下さったのです。私は、自分の不明に恥ずかしさを覚えると共に、思わず感動で涙ぐみました。

1999年の訪問時は、色々と献眼活動の御苦労話をお伺いしました。こんな具合です。

「冬、寒さの中で、医師を出迎えに出た会員が戸外で夜が明けるまで待たされたこともありました。」

「ある献眼者の場合は、クラブ会員を含めて参列者が11人と云う寂しい野辺送りだったこともございました。」

「告別式の参加者が献眼の奉仕に感動して、その場で自らも献眼登録を申し出てくれたこともありました。」

当時、小山LC事務局で、献眼者が出ると、会員に連絡したり、眼球摘出医の手配連絡を担当されていたのが尾登靖子さんでした。尾登さんが色々お話し下さった中で、次の様な「葬儀屋さん協力体制の出来上がり」話を伺って、献眼活動は「ここまで根を下ろしているな」と云う感慨を深かめたものです。

「今は、葬儀屋さんが一寸（ちょっと）とご遺族に声をかけて下さって、ご遺族の承諾を得たよ、と私に連絡して下さいます。」

ついこの間だったと思っていた父・名和田豊の336-D地区献眼運動立ち上げから、もう30年が経ち、初期に献眼運動を共にされた多くの方々が、既に、幽明境を異にされました。今は、唯々、感謝の念と共に、その方々のご冥福を祈るのみです。そして、改めて、多くの献眼者ご遺族のご善行に深い敬意を捧げたいと思います。

また、ライオンズ会員を初めとする献眼運動推進の方々の奉仕の積み重ねには、格段の感謝を申し上げたい気持ちが一杯でございます。どうぞ、末永くご活動をお続け下さいますようお願い申し上げます。

注記）財団法人やまぐち角膜・腎臓等複合バンクは平成24年４月１日公益財団法人やまぐち移植医療推進財団に名称を変更しましたが、角膜及び臓器の移植に関する業務は、設立当時をそのまま引き継いでいます。

会葬礼状と奥様の決意

献眼者ご遺族

謹啓　○○○○　儀葬儀に際しましては御多用中のところ遠路わざわざ御会葬いただき　御芳情のほど誠に有難く厚くお礼申しあげます。

尚　故人が生前中に賜りました格別の御懇情にたいしましても茲に併せて熱くお礼申し上げます。個人は生前篤志をもって医学研究のため献体と献眼を希望し告別式の後個人の意思を尊重し医学部におくります。

遺族と致しましては故人との約束を果たし、わずかなりとも世のため人のために尽くしたいと存じます。ありがとうございます。　合掌

暑い中ようこそ感謝状ご持参ありがとうございました。

誠にありがたく厚く御礼申し上げます。

小野村様のお話しの中より主人に対しての身に余るお言葉まで頂きましたこと、遺族と致しましてもうれしいことでした。

目の不自由の方々への暖かい思いやり、献眼の方々が多くなりますことを願ってやみません。私達の家族でも献眼の事を話し合いました。アイバンクの方々のお力はとても大きいものがあると思います。どうぞ身体気をつけられましてがんばって下さいませ。提供させていただいた家族といたしましても、色々な方々へのお話の中で広めたいと思います。

亡き主人に感謝

献眼者ご遺族

「ドーク」「ドーク」と病室のマイクから流れる主人の心音を聞いていました。病室のベッドの横に並んで腰掛けている娘が突然「お母さん、お父さんアイバンクしてもらおうよ」と突然に言い、その横にいる孫娘も頭を上げ「私もさっきからそれを考えていたの」と言い、私は頭の中は真っ白で理解できませんでした。

主人は平成○○年○月○○日に脳梗塞で倒れ、入退院を繰り返しいろんなスタッフの方々にお世話になりながら半身麻痺は残りましたが、思考も言語力も戻っていました。しかしながら8年目の最後の1年は誤嚥と肺炎との戦いで口からの食事は無しで、点滴で好きなテレビを見たり「まだ生きている」と笑っていました。私も1年間は毎日病室で過ごす時間を作りました。其の病院では初めてのアイバンク患者との事で医師会にＴＥＬして書類を揃えたり、随分迷惑を掛けたようです。只今では眼球を乾燥させないように眼帯で清潔にとその姿を夢に見ます。今回の記念事業(慰霊式)への出席の許しを戴きやっとほっとしました。去る○月○日が7回忌で重ねて供養になればと出来るだけ明るく気持ちを持ち直して出席いたします。

私は、お陰さまで後期高齢者のお仲間入りいたしましたが主人のお陰でいろんな勉強をさせて貰い感謝いたしております。

いまもなお　主人の介護の　あの日　あの時
夢に見ゆ

月下美人と母の想い出

献眼者ご遺族

○年目の母の命日、○月○○日が近づいて来ました。

○○年前の年末に転居した時、母が大切にしていた月下美人の花を寒さで枯らしてしまいました。その後再度、月下美人を育てている方から株を分けて貰い、成長を楽しみに世話をしていました。母は88才頃から次第に手足の麻痺が進み、自宅での生活が難しくなりました。旅立つまでの２年余りを老人ホームでお世話になりました。

私がライオンズクラブ事務局に勤めていた事もあり、母は自発的に角膜提供の登録をしていました。母の意思を尊重する事に、家族も異議はなく、バンクへの提供の連絡も速やかに出来ました。

摘出した角膜は、91才とは思えない良い状態で、若い二人の方に移植出来たとバンクの方から聞きました。

母は、60才頃から白内障の予防の為に眼科で目薬を処方して貰い、外出時は、目の保護にサングラスをかけるなど心配りしていたのも良かったのでしょう。二人の方の視力回復に役立った事、改めて角膜提供の重要さを痛感しました。

母が楽しみに開花を待っていた月下美人は、母の１周忌に、初めて見事に大きい花を咲かせました。昨年は、二度に亘り20個もの花が咲きました。

今年は、８個の蕾が日毎に膨らんでいます。母の○回目の命日の頃に、芳醇な香りと共に真っ白な花の姿を見る事が出来たらと楽しみに待っています。

母が好きだった花が命日の頃に咲くというのも不思議な縁を感じます。

父の献眼から始まった事業

献眼者ご遺族

母が病魔に倒れて１年半が過ぎたころ、母の看病をしていた父は肺の病気で、他界しました。あっけない別れでした。その直後、献眼のことを思い出したのです。

父の処置の間、体に刃物をいれるのは、正直、喉に何か痞えたような感じがしました。

私は一人息子なので、決定は私次第なのですが、父が献眼登録をしているかどうかあやふやでした。

二人の方に光を、そして、次の待っている方へと受け継がれ、永く使用される大変良い事とは理解していますが。いざ自分のこととなると、本当にこれで良かったのか、不安がよぎりました。私は仏教とは無縁でした。父の葬儀でお寺様との出逢いが始まりでした。

仏教の説法でその方は言われました。

「私にも同じように倒れた父がおります。しかし同じような事が出来るかどうか私にはわかりません。お釈迦様へウサギが身を差し出した布施行（善行）のように、故人が体を使った最後の布施行、遺族が故人へ贈れる、無量無数倍の功徳となるでしょう」と、涙を浮かべて言われました。咽喉の痞えがなくなりました。

２年後、ライオンズクラブの多数の友人の応援で、家族葬・海洋散骨の会社の経営を始めました。実務に携わったのは、今年からになりますが、出来るだけ献眼のお願いをするようになりました。故人の運転免許証、健康保険証、意思表示カード等に、故人の意志が書いてあるかどうかお尋ねします。後に父が、ライオンズクラブの献眼登録で、カードを持っていたのが分りました。故人の善意が無駄にならないように、遺族に悔いが残らないようにとお尋ねします。

故人の最後の善行と遺族が贈れる最高の功徳供養が、献眼である事が広く知られ、普通のこととなるよう願ってやみません。

母を偲んで

献眼者ご遺族

母は、平成○○年○月○○日94才で静かに永眠いたしました。

戦前、戦後の食べるものが無い時代‥‥９人の兄妹を育ててくれました。

双子で生まれた私達兄弟には特に手が掛かったことと思います。小学生の頃、母の手伝いをするのが勉強よりも好きで、身を粉にして共に汗を流した母との絆が、熱心にアイバンク活動をしている私に、母が献眼という崇高なるプレゼントをしてくれたのです。終戦後、生活の苦しい時代に誰が尋ねて来ても嫌な顔一つせず優しく接してくれた人間愛に満ちた母の、人生最期の奉仕でした。

会社から帰る道すがら信号待ちしていると、時節はずれのホタルでしょうか、ふーっとフロントガラスを横切りました。

逝きてなほ　光みちびく　母ほたる

残念でなりません。

献眼移植者ご遺族

今回、大事なお手紙を頂きました事に感謝致しております。

主人は平成22年12月24日他界致しまして、せっかく献眼戴きましたのにとても残念でなりません。生前はほんとうに有難うございました。

まずは御礼と御報告にて失礼致します。

家族と話合うこと

生体腎提供者・献眼者ご遺族

私は、2006年12月にドナーとして長男へ腎臓を提供し、○年○月に父の死去に際し角膜提供を母と共に承諾しました。移植を待つレシピエントの家族としてドナーとなった気持ち、父の角膜提供を承諾した時の思いを綴ります。

初めに移植を待つレシピエントの家族としてドナーとなった気持ちからお話します。長男は天真爛漫で特に体調の悪い所もなく元気に生活していました。小学3年生の春に学校の尿検査で再検査の指摘を受け市内の病院を受診しました。軽いタンパク尿が認められましたが、経過観察となり1年間様子を見ました。翌年再度指摘があり、総合病院で精密検査を受け山口大学医学部附属病院小児科の先生の診察を受けました。

日頃から元気だったため軽い病気と考えていましたが、医大の泌尿器科の先生より検査結果を説明するとの連絡があり、夫婦で説明を聞く事となりました。説明によると、“多発性のう胞腎症”が進行し、治療方法は無いとの事で、一瞬何を言われたのか理解できず、“病気の進行に伴い腎臓は肥大し腎機能は低下、数年後に透析を開始するか腎移植が必要となるため、治療方法の選択を考えてください。”との説明を茫然と聞いていました。

1989年に国内で初めて生体間肝臓部分移植が行われた事は、移植を受けた方と長女が同世代であり報道等で見聞きしていましたが、まさか私たち家族が移植に係る事になるとは、夢にも考えていませんでした。低年齢からの透析は本人への負担や不安もあり、腎移植を考えたのですが、当時の臓器移植法では15歳未満の脳死ドナーは認められておらず、献腎ドナーは事例が少なく、いつ移植が出来るか判らないため、生体間腎移植を選択しました。

ドナーになると言っても、当時は切開術で、健康な体にメスを入れ腎臓を摘出する事、将来的に腎臓はひとつで問題は無いのか？働き盛りでもあり体力が元通り戻るのか？また手術の失敗はないのか等、色々悩み迷いましたが、徐々に体調が悪くなり不安な日々を過ごしている長男の事を考え、迷う事をやめてドナーとなる決心をし、マッチテストを受けました。

体格差もあり即移植とは行かず、長男は病状を観察しながら、タンパク質・塩分・カリウム・リンの食事制限を開始しました。食べ盛りだった長男にとっては、普通の食事がある日から制限食となる等、制限のある生活は苦しい日々だったと思います。タンパク質調整米などの食材は高額で保険適用もなく、妻は苦労していた様です。また中学への進学時期で、給食が問題になりましたが、タンパク質調整米と専用の炊飯器を持参し、副食は個別調理をして頂ける事となり、学校には他にも様々なご配慮やご協力を頂き感謝しています。

毎月微妙に検査の数値が上昇し、体調がすぐれない日々に本人が一番辛かったと思いますが、持ち前の明るさで周囲を和ませてくれていました。可能な限り本人の成長を待ち、病状が悪化すれば手術を行うとの説明を受けていましたが、手術日が確定していない不安な移植を待つ日々が続きました。

私は仕事の関係で長期出張していましたが、長男が中学2年生になった秋頃、病院から術前検査の連絡があり1週間の検査入院となりました。飲酒過多もありドナーとなれるか、どんな手術になるのか等、不安で心が折れそうな検査入院でしたが、奥さんに腎提供された同室の患者さんから手術の経過やご自身の体験など色々なアドバイスを頂きました。主治医の先生から術前検査の結果と、手術の詳しい説明を受け、麻酔が効く直前まで提供を取りやめる事が出来る事を聞き、また看護師さんから術後のケアの説明があり不安は和らぎました。

手術への不安から、ドナーの方が手術前に提供を断念される事もあると聞いていましたが、今思えば、先生方の丁寧な説明と看護師の皆さんの暖かいご配慮のおかげで、手術日を迎えても特に不安が増す事もなく、安心して手術に臨む事ができました。ちょっとした勘違いから手術翌日に歩いてしまい病棟の皆さんを驚かせ、またご心配をおかけする事もありましたが、手術後1週間で退院となり、長男は移植に伴い肥大した腎臓を摘出したため退院が少し遅れましたが、心配した急性拒絶反応もなく、スタッフの皆さんの暖かいケアを頂き、無事退院し、普通の生活を取戻す事ができました。

翌年の夏頃、長男が体調を崩し再入院となり検査の結果、サイトメガロウィルス感染症とEBウィルス感染症の両方に感染していて、生還例が少ないとの説明を受け心配しました。しかし、先生方の適切な処置と献身的な看護を受け、また後ほど紹介させて頂きますが、何度もガンを克服した祖父が自慢だった長男は、“不死身のDNAを隔世遺伝しているから、病気には絶対に負けない”と口にし、無事病気を克服してくれました。

移植を待つ間、いつ病状が急変するか分からない不安や食事制限に耐え、取戻す事のできた普通の生活。大好きな白いご飯“本人曰く固めのコメがベスト！”と、豚肉を食べられる至福の食卓、体調不良から一度挫折した高校生活も、自ら希望し定時制高校を卒業後、現在は大学生です。アルバイトをしながら、多少の制限はあるものの元気に動き回れる自由を満喫しています。

個人的な感覚ですが、私は未だに腎臓が無くなった感覚はありません。ドナーとして腎提供後、多くの方に“よくやったな”“おまえすごいな”と声をかけて頂きましたが、日々体調が悪くなる子供や家族が目の前で苦しんでいる姿を見れば、自分の出来る事を選択する事は特別な事ではなく、ごく自然な事だと思います。

夫婦間や兄弟で、私の事例とは逆に子から親へなど親族間での移植が可能ですが、親族間での不和の一因となると聞いた事もあります。最善の方法を話合う事が大切です。生体間移植はレシピエントに係る身体的リスク・精神的負担があります。また今年になって生体間腎移植のドナーが手術後に亡くなられたとの報道がありました。レシピエントの手術が100％成功するとは限らず、リスクが伴う事を改めて実感しています。

ここからは昨年他界した父のお話しをさせて頂きます。

父は1985年に食道ガンを発病し、摘出術で食道と胃の1/3を切除し108針縫合する大きな手術を受けました。その後も胃ガン・喉頭ガン・大腸ガンなど何度もガンを克服し、術式も摘出術に始まり腹腔鏡術・内視鏡術と医療の進歩もあり、ちょっと手術してくると日帰りした事もありました。

当時、父はライオンズクラブに在籍しており、アイバンク“読売光と愛の事業団”へ 1986年に夫婦で献眼登録をし、その後1993年“やまぐち角膜・腎臓等複合バンク”の設立に伴い登録を移行しており、早い時期から献眼登録していた事に驚きました。

長男の手術後、父母と家族で移植の事や献眼について話合う事がよくありました。父は、孫が移植を受け元気になった事を人一倍喜び、体調を崩した時も病室へ足を運んで励まし、自分自身の病歴もあり医療や特に移植医療に対する感謝の気持ちを語り、自身が最後を迎える時には、“必ず献眼をしてくれ”と、母や私たちが承諾する事を強く希望していました。

父は2008年の夏に胆のうガンと診断され、胆のうと肝臓の一部及びリンパ節を摘出する手術を受け、手術は成功しましたが体力が持つかが不安でした。常に父を傍で支え続けた母の献身的な介助と、不死身の二人が互いに励まし合い、2年掛りましたが散歩が日課になるまでに回復していました。

○年○月に入った頃、急に体調を崩して入院し、主治医の先生から病状の説明を母と受けました。覚悟はしていましたが、胆のうガンの飛沫細胞による転移で、肝肥大と肺機能低下があり末期の状態との事で、ターミナルケアについて希望を聞かれました。これ以上父に負担を掛けたくないとの母の思いから延命治療は希望しない事、父の意志を尊重し献眼を希望する事を伝えました。

献眼については病院で前例が無く末期ガンでもあり無理ではないかと説明があり、“なぜ無理ですか？”と思わず聞き直しました。市内の中核病院でなぜ献眼に対応できないのか、前例が無いからと言う事で父の意志を無にする事は出来ないと伝え、やまぐち移植医療推進財団への確認を依頼

し、私からも財団へ連絡し対応をお願いしました。私は日頃から財団と関わりを持っていた事もあり、直接財団へ相談ができましたが、普通に献眼を希望しても献眼できなかったのではないかと考えると、医療に携わる皆さんの連携により、献眼・移植医療の和が広がる事を希望します。

その後、改めて母に献眼の意思確認が行われ、献眼を希望した事により、父や家族に負担が掛らない様ご配慮を頂きました。病院も私自身も初めての献眼で、父の意識が一時的に混濁した時、「そろそろ眼にガーゼを当てましょうか？」と、看護師の方からご相談を受け、「心停止までは大丈夫ですよ。」と、お答えした事もありました。

残された日々、夫婦として50年、発病後27年間、常に父を支えた続けた母と、お互いに不死身と呼び合った二人が笑顔で語りあっている姿が印象的でした。多くの方にお見舞いを頂き、“家の風呂に入りたい”との最後の我が儘を許された数日後、父は苦しむ事もなく静かに息を引き取りました。臨終に際し、病院のご配慮で献眼は病室で行う事となり、私の兄弟は同席していませんでしたが、事前に父の意志を伝え承諾しており、アイバンクコーディネーターの説明を受け母が承諾書に署名し、摘出医の到着を待ちました。憔悴している母を守るためか、恐ろしい程冷静に対応しつつ張詰めた時間を父の傍で心静かに過ごす事ができました。術後、安らかに目を閉じて笑顔にも見えた父の顔は忘れられません。

その時を前に、病院の皆さんに様々な対応をして頂いていた事を知り感謝しています。また後日、病院において院内コーディネーターの登録をされ、移植医療に対する体制を整えられたと聞きしました。父の献眼を機に、市内の移植医療体制が一歩進んだ事を父も喜んでいる事と思います。

通夜・葬儀を前に、親族から父の意志を多くの方に伝えたいとの希望があり、財団の小野村さんに相談し、献眼のリーフレットや花の種などの啓発資材を提供して頂き、ライオンズクラブのメンバーの協力により会葬御礼とあわせ配らせて頂きました。夏には多くの方から、ひまわり開花の便りが届きました。

医療は日々進歩していますが、移植医療はドナーの存在が不可欠です。尊いひとつの命のもと、本人と家族の意思により行う事が出来る高度な医療です。子供の病状を思い藁をもつかむ気持ちで子供の成長を見守った日々…。移植後、思う存分食事をしている姿に感謝した移植医療。父の死を覚悟した時、父の意志を尊重しようと恐ろしいほど冷静に対応した自分自身の判断、“本当に良かったのか”“一人涙した時、献眼後の父の顔が心の支えであり、父の意志を尊重する事が残された家族の意思でした。

長男が20歳を迎え、家族で話合い、母親となった娘と長男も自分の意志でドナー登録を行いました。長男は、毎日免疫抑制剤を服用していますが、10年20年後には再びドナーを待つ事となります。長女は一度諦めた看護の道を目指し頑張り始めました。

移植を希望し、その日を待ちドナーとなり、また母と共に父の献眼を承諾した家族として、その両方を体験し、夢にも考えていなかった移植医療と係わり、様々な事を学びました。2010年7月の改正臓器移植法の施行により、脳死提供は徐々に増加していますが、本人の意思表示が無く家族の承諾により行われる事例が多くなっています。

医療に携わる皆さんに移植医療の現状について考慮頂き、皆さんのフォローアップにより、献眼・移植医療が普及し、移植を待つ方々に希望を持って病気に向き合える機会が増える事を願っています。また私たち体験者が、その時の事をお話しさせて頂くことも一助となると思います。

終わりに、ある講演会で体験談をお話しさせて頂いた折に、“眼を盗られた気持ちはありませんでしたか？”との、ご質問がありました。確かに、献眼は眼球を摘出する術式とはなりますが、本人がその命の終焉にあたり、お二人の方に光が戻ることを希望し、その意思を尊重する事は、家族にしかできません。

“その時をどう迎えるか”自分の意志を持つ事、日頃から家族で話合い、その意思を共有する事が大切です。移植を待つ多くの方に、人生の転機ともなる第2の誕生日を迎えて頂ける事を願って止みません。

「母」

献眼者ご遺族

母は、68年の生涯でした。若い時から心臓の働きが悪く心臓弁膜症の手術も受け家族のために一生懸命生きようとしてくれました。お転婆な私はよく叱られましたが、持病のため大きな声を出す事はなく、誰にもいつもにこにこして穏やかに接する人でした。自分や娘の病気を通して健康の大切さを知っていた母は、臓器提供意思表示カードに自分の気持ちを記入していました。
「母はどんな人だったのか・・・」

寛大で温和で裏表がなく祖父母に尽くし父のよき助けとなり娘の話もよく聞いてくれた。家庭が平和で幸福であるための欠かせない存在だった。母の角膜が目の病気で苦しんでいる人のお役にたてよかったと思う。娘A

家族の健康に常に気を配り争い事が嫌いな人。55歳まで祖父の家業のお手伝いをし、辛抱人だった。今は母もあの世で素敵な目を頂き喜んでいる事でしょう。娘B

控えめで、いつも影から優しく見守り応援してくれた。自分より人の事を心配してくれる人。
娘婿

病気をしていないか、必要なものを我慢しているのではないかとよく気にかけてくれ、可愛がってくれた優しい祖母だった。孫A

いつも祖父の後ろを歩く印象。僕が赤ちゃんの時、祖母がおんぶして配達の仕事のため運転していてぶつかりそうになり、怪我をさせなくてよかったと深く反省したと聞いた事がある。祖母の角膜の提供の意思が尊重され、提供できた事は、とてもよかったと思っている。孫B

優しく接してくれ、気遣ってくれた。早く逝ってしまい淋しい。亡くなる前、モダンなブラウスとスカートをプレゼントしてくれたが、私の一番のお気に入りになった。百歳の伯母

母は、残り僅かな最期を40年近くお世話になった病院の個室で過ごしましたが、家族の写真を飾ったり、夫、子、孫達が入れ代わり立代りそばに寄り添い、少しだけホスピスのようでした。母は亡くなる直前、皆がいる前で苦しい息の中、「母さんは、もうすぐ話せなくなると思うから言っておく。今まで、よく看てくれてありがとう。皆、体に気をつけて仲良くやってちょうだいね。」と言いました。最期の時、私に起こしてというと父の顔を見ながら私の腕の中で、息を引き取りました。角膜の提供の連絡は、病院からして頂き、山口大学病院の眼科チームの先生方が来られ手術は病室でできました。手術をされた医師が「尊いご意思をありがとうございました。必ずお役に立てるよう尽力します。」と父に告げると病室を後にされました。その後、長年、母とかかわりのあった多くの看護師さんが病室にお別れに来てくださいました。
角膜提供をした母を父は、「母ちゃんは、世のため人のため、いい事をしたよ。」と、よく私に言いました。
今は、父と雲の上で仲良く、好きな木々や花々を愛で散策しながら楽しく過ごしている事でしょう。
難病で苦しんでおられる方々が、少しでもお元気になられますよう移植治療への理解が進む事を願っております。

ありがとうございました。

献眼移植者ご遺族

角膜を提供してくださり、ありがとうございました。
父は手術を受けて半年もたたないうちに脳腫瘍で亡くなりました。
せっかく移植を受けることが出来たのですが・・・。
お世話になりました。

「最期の贈りもの」を通して

献眼者ご遺族

その時、私達親族は突然の信じられない出来事に愕然とし、大きな悲嘆のうずの中にいました。しかし、「最期は社会のために」という夫の生前の臓器提供の意思を尊重しようと決断し、可能な角膜提供の申し出をしました。

手術が無事すみ、そこに眠る夫は、とても安らかな穏やかな顔をしていました。摘出に携われた先生は「若い・・」と第一印象思われ胸がつまされたそうで敬意をもって慎重に最善を尽くしてくださったそうです。夫の角膜はとてもきれいな健康な角膜であったそうです。「おつかれさま、よく頑張ったね」凛としたその姿は、神々しく立派にも思えました。夫は通勤途中、急性の心不全で五十六年の人生を閉じました。

夫は、長年仕事に心を尽くし、ちょっと人が良すぎるところもありましたが、妻からみても誠実で責任感があり、こまめで温厚な人でした。まだまだバリバリ仕事もしたかった事と思います。亡くなる数日前、昔使っていたカメラのレンズを取り出して磨きながら「又、山へ登りたいなー」と言っていました。数年後、仕事が落ち着いたら「妻と巡る日本の世界遺産の旅」も楽しみにしていて、自然にふれる事が大好きな人でした。

夫の死は、とても辛い事でしたが、死後の夫の角膜を提供でき二人の方の健康回復につながった事は善かったと思っています。人は最愛の人に「元気でいてほしい、生きてほしい」と願うのではないでしょうか。私も夫に生きてほしかった。しかし、移植治療でしか助からない、回復が見込めない患者さんがたくさんおられ、移植を希望して待っておられる事も、待ちながら亡くなられている事も知っていました。誰の命も誰の健康も尊く大切なものです。夫の意思が、そして私達親族の決断が、誰かの生きる希望となり健康をとり戻す少しでも助けになったのならば素直にとても嬉しく思います。夫の人生最期の贈りものを患者さんに届けて頂くために、間に立ってご尽力頂いた医療関係の方々、コーディネーターに感謝申しあげます。

提供を通じて確認した事は、

●救命が100％先である

●提供は強制でも義務でもなく本人や家族の善意によるもの…日頃から家族で話し合い、自分の気持ちを伝えておく事が必要と思う。

又、願う事は、

●提供が決断された時、尊い意思をつなぐため最善が尽くされるよう、そして、悲嘆の中にいる家族の負担を軽くし、配慮できるよう可能性のある病院では日頃から勉強会や模擬訓練が推進される事

●可能性のある病院では、問診票に、臓器提供意思表示カード（免許証や健康保険証を含む）を①持っている②持っていない③わからない④説明を聞きたい等の項目をつくる事

●脳死状態になった時、今後の治療説明の中に選択肢として臓器提供も家族に提示してほしい（最期の選択を決断するのは家族だから）

●そして、提供しても、しなくても尊重されるあたたかい成熟した社会である事

等・・です。

そう遠くない将来、先端を行く病院では、臓器提供だけでなく、延命医療行為に対する意思も確認するようなシステムができるかも知れません。これから私達も、自分の最期をどのように自分らしく生ききるか、という事を日頃から考え家族と話し合う機会が増えてゆくのではないでしょうか。

今年○年の命日の朝、庭に一本の白百合が花を咲かせていました。なぜ、ここに？と、びっくりしました。夫からのプレゼントのようで、ふっと笑顔になりました。夫は、今も妻の手をしっかり引いて一緒にゆっくりゆっくり歩んでくれているような気がしました。

献眼を終えて

献眼者ご遺族

私共家族は主人と息子二人と献眼・献腎の登録をしております。

主人は腎不全で透析を受けていました。万一のことがあった場合には角膜の提供が出来ればしようと、献眼登録をしていたことを思い出していました。その時は、平成○○年○月○○日におとずれました。

夜中の死亡でしたが献眼出来ることとなり、アイバンクの方と連絡を取りながら家で医師の到着を待ちました。

一時間位で摘出が終わり一安心致しました。

葬儀も終わりアイバンクの方が感謝状を持って仏参りに来られた時に、年令と病気にもかかわらず角膜の細胞数が2,800以上もある「立派な角膜でした」と知らされました。直ぐにお二人の方に移植が行われたそうです。

身体は無くなってもこの世のどこかで細胞が生きているんだなと思うと、淋しさの反面、又、違った別の思いがあります。

人生の最後に人様のお役に立てたことを、うれしく思いました。私も今は健康に恵まれています。もしもの場合には角膜、腎臓の提供を忘れずにして欲しいと二人の息子に伝えてあります。

残された者が故人の意思を尊重し、きちんと手続き出来ることが献眼・献腎につながる大事なことだと思います。

最後にお世話になりました関係者の方々に感謝とお礼を申し上げます。

献腎移植を受けて

献腎移植者

私が献腎移植を受けて、間もなく丸○年を迎えます。

このたびの式典を迎えるにあたり、臓器提供のご意志を示しておられたドナー様と深い悲しみの中、そのご意志を認めてくださったご家族様に対し、改めて深い感謝の気持ちを感じております。

私は大学入学直後の健康診断から、毎年蛋白尿が検出されるようになりましたが、特に体調が優れないわけでもなく、結局６年間放置しておりました。

一度きちんと検査をした方がよいということで、腎臓の組織をとって調べていただいた結果、進行性の腎炎で症状も進んでいることが分かり、３か月の入院治療を行いました。

入院中は点滴治療や食事療法、安静によって進行に歯止めをかけることができましたが、復職するとまた進行が始まり、結局３度の入院の後、透析に入りました。

透析生活は比較的元気に過ごすことができましたが、翌日に頭痛を感じたり、夏場には職場の休憩室で横になっていることもありました。また、週３回、４～５時間の透析は時間的制約も多く、たまった仕事をこなすために休日出勤することも日常となっていました。

透析生活が11年余り続いた頃、夜中に突然、臓器提供のお話をいただきました。医師から県内での献腎移植の実態を聞かされておりましたので、まさか自分が腎臓を提供していただけるとは思ってもいませんでしたし、突然のお話に正直、戸惑いもありました。数時間の限られた時間で、家族や職場の上司とも話し合い、このような機会に恵まれることは二度とないこととと思い、移植のお願いをいたしました。

術後はウイルス感染にかかってお腹が妊婦のように膨れあがったり、長年の透析で膀胱が萎縮していたために、夜中も数十分おきにトイレに行かなければならないなど、辛いこともありましたが、拒絶反応が出ることもなく症状も徐々に落ち着いていきました。

今では、職場で横になることもなくなり、夜中に起きることも１～２回になって睡眠も十分とれるようになりました。時間的・精神的な余裕もでき、家族と過ごす時間もたくさん持てるようになりました。

このような様々な変化や喜びを感じることができるのも、ドナー様やご家族様の深いご理解のお蔭であると、心から感謝しております。

ドナー様のご冥福をお祈りいたしますとともに、尊いお気持ちにお応えするためにも、いただいた腎臓をこれからも大切にしていきたいと思います。

母の献眼に寄せて

献眼者ご遺族

大正６年６月１日生まれの母が○年○月○○日に永眠いたしました。

満96歳に７日足りない人生に幕を閉じましたが、亡くなる一週間前までは元気に話しができ、歩いておりました。

それが突然意識をなくし、新南陽市民病院に入院、検査の結果「高アンモニア血しょう」と診断され、高齢でもあり治療の甲斐も無く家族・親族の見守るなか静かに息を引き取りました。

母には生前、献眼について詳しく説明し了解を得て献眼登録もしていましたので、いざという時には直ぐ献眼の対応を取るつもりでおりましたが、予期せぬ母の死で私自身献眼のことなど脳裏から全く消え、ある方から言われて「ああそうだった」と思いだすような事でした。

私の兄弟も母の献眼については「それは良い事だ」と快く理解してくれましたので、直ぐに新南陽若山ライオンズクラブを通じ、移植医療推進財団に連絡するとともに、市民病院にもその意思を伝えました。

当該財団からは、アイバンクコーディネーターの小野村さんがまっ先にお越しなり必要な書類手続等を済ませ、山口大学から二名の医師が到着されて手術が始まりました。

新南陽市民病院内での献眼は初めてのケースだったようですが、眼球の乾燥を防ぐ事前の処置や、当該手術を行う病室の提供、更には、看護師さん数人が勉強のために手術に立ち会うなど非常に協力的でした。

約30分程で手術が終わり安らかに眠る母の顔に接したとき、自分も同じく献眼をするぞということを心のなかで母に誓うと同時に、妻や子供には改めて私の言葉で献眼の意思を伝えた次第です。

角膜障害で暗闇の世界におられる方々が、不自由な生活から一変して明るい生活に戻られることを想像するとき、激動の時代を生き抜いた母が、人生最後の奉仕として崇高な灯かりを提供してくれたことを誇りに思うとともに感謝の気持ちで一杯です。

家族と話し合う大切さ

献眼者ご遺族

公益財団法人設立二十周年おめでとうございます。

夫が亡くなり、今年○月○○日で丁度○年を迎えました。夫は、萩ライオンズクラブに所属していました。当時、「市民奉仕活動」の委員だった頃、「アイバンク」に登録するべきかどうか話しかけてきましたので、私もつい「あっ、いいね」「いいんじゃないの。人の役にたてるよ!」と言ったことがきっかけでその後登録した様でした。その時には、こうも早く献眼することになるとは誰にも予測できなかったのです。そして、平成○○年○月○○日朝、帰らざる人となりました。

献眼の事は家族の者には知らせていなかったこともあり、その場で説明し相談をし、承知、了解してくれましたので決断しました。そして直ぐにライオンズクラブの竹下さんに連絡、確認をしていただき、山口大学医学部眼科の先生の到着を待ち、家族の見守る中での両眼の摘出手術。緊張の中で、ていねいに処置され、大切に保管されて持ち帰られましたことを、今でも私の脳裏にはっきりと焼きついて忘れることはできません。

葬式が終わって何日か経った日、アイバンクより夫の献眼で「お二人の方が光をとり戻されました。」という報告をいただき、胸がジーンと熱くなるのを感じました。「お役に立てて本当に良かったね」と仏前に報告し、文面もお供えさせていただきました。

「自分にもできること、小さなことでも誰かを支えられる」と思うと、常日頃から家族と一緒に移植医療のことについて考え話し合うことの大切さを夫から教わりました。

貴財団の事業・活動がさらなる発展をされますこと願ってやみません。

主人の献眼をして

献眼者ご遺族

平成〇〇年、主人の献眼をさせていただきました。

私自身、お二人の方より角膜をいただいて、両眼とも移植を受けています。

いつも、お二人の方に感謝し暮らしています。

平成〇年、右目の移植を受けました。主人が「母さんが、手術を受けて目がよく見えるようになったのだから、自分が亡くなったら献眼してほしい。」と言うのでその翌年に献眼登録をしました。

10時30分救急車で病院へ。翌日午後4時20分肺炎で亡くなりました。先生が、「4時20分です。」と言われ、しばらくして、私の口から「お父さんありがとう。」と言う言葉が出てきました。急な事でしたが、先生に献眼の事を伝えると病院から連絡を取ってくださいました。家に連れて帰り、山口医大より先生が来て下さって自宅での摘出手術でした。目が凹んでいるのではと不安でしたが、とても穏やかな顔をしていたのでほっとしました。

主人の兄弟に相談していませんでしたが、一人として文句を言う人もなく「良い事をした。」と言ってもらって、嬉しくなりました。

多くの方から「良い事をされましたね。」と言われ本当によかったとつくづく思います。

一ヶ月後、診察に行った時、先生よりお二人に移植された事を聞きました。角膜移植により、多くの方が光を取り戻されることを願っています。

お父さん、本当にありがとう。お二人の光となっていつまでも生き続けて下さいね。

東日本大震災と息子の決意

献眼者ご遺族

息子の死は突然訪れました。

いつも起床する時間になっても起きてくる気配がなかったので、息子の部屋に行ってみると、すでに冷たくなっている息子の姿が目に入ってきました。

息子は前日まで普段通り元気で夕食の時に一緒にTVを観ながら楽しく会話をしたので変わり果てた姿を目のあたりにしても、揺らせば目を覚ましてくれるのではないか、悪い夢をみているのではないかと息子の死を受け入れることができませんでした。

そのような心境でしたから、私は最初、息子の身体にメスを入れることに賛成できませんでした。メスを入れることで本当に息子は遠い世界に旅立ち、もう二度と私の元に戻ってこないということを突き付けられるからです。

様々な手続きを進めていく中で、臓器移植の話をされました。息子の健康保険証を取り出し、息子の意思確認すると私はハッとしました。臓器提供に丸が付けられていました。私が半信半疑でいると、娘がこんな話をし始めました。

「そういえばお兄ちゃん、東日本大震災があった時、報道を見ながら私に『被害者の人、かわいそうだよな。困った人の為に何かしてあげたいよな』って話しかけてきたんだよね。普段、真面目な話を私にしないのにめずらしいなって、その時に思って…これもお兄ちゃんなりに考えたことの一つだったのかもしれないね。」

記入日を見てみると、「2011年3月11日」となっており、東日本大震災が起こった日と同じ日でした。それを知った瞬間、息子の他人を思いやる優しい気持ちに強く心を打たれ、私は激しく泣きました。泣いている内に私が親として最後にしてあげられることは息子の意志を尊重することではないかと思い、臓器移植に同意することにしました。

後日、アイバンクの方より、息子の角膜の提供により、二名の方に光を与えることができたこと、順調に回復され、退院されたとお聞きしました。その報告を聞き、私は息子の意志を尊重してよかったと思いました。それと同時に息子の思いやりが二名の方の光となって今後も生き続けてくれることが、私の生きる希望になってくれるように感じました。

日本ではまだまだ移植希望者に対し、臓器提供者が少ないと聞きます。臓器移植に対する正しい知識と情報が普及すると共に一人一人が関心をもち、考える機会が増えて欲しいと私は思います。そうなることで、一人でも多くの方に生きる力と希望がもたらされればと心から願っております。

健康に働ける幸せ

献眼移植者

私は約10年程前、両眼に初期の緑内障が見つかり、地元の眼科医で悪化防止の治療を継続してきました。平成○○年７月に左眼が角膜潰瘍になり点眼治療にもかかわらず、悪化してしまいました。

9月下旬に山口大学病院を紹介され受診しました。フィブロネクチン点眼で上皮膜を再生する治療と角膜部分移植の選択枝がありましたが、まず前者を選択し入院治療を開始、上皮が８~9割再生した時点で退院しました。その後も外来治療を継続しましたが、年末近くに最も深く浸食され上皮未形成の部分が破れ、近間先生執刀で緊急に角膜部分移植手術をして頂きました。その後約２週間後に退院し、外来で治療を受けました。

現在は、緑内障治療と角膜点検で毎月１回地元の眼科医に通院し、山口大学病院で４か月毎の点検のみで良好な経過を維持出来ています。運転免許証の更新も問題ありませんでした。

このように健康を回復出来たことは、角膜提供者、先生方や医療関係者の皆様のおかげです。本当に有難うございます。

再生医療技術も急速に進歩しているようですが、実用化にはまだ多くの努力と時間が必要と思われます。これからも臓器提供・移植により健康を回復出来る方が数多くおられると思います。移植医療推進財団のご活躍を期待しております。

私は平成21年に前の会社を定年退職しましたが、翌年には別会社に再就職し、研究開発・製造・品質管理などの仕事を楽しんでおります。いま私に出来る事は、回復した視力を長く維持しつつ、生涯一技術者として役立つ製品を開発・製造し、社会貢献することです。そのような形で、皆様に恩返しが出来れば幸いです。

角膜移植手術を受けて

献眼移植者

私は角膜移植についは全く知識がなく自分がレシピエントになるとは、夢にも思ってはおりませんでした。唯、オロオロするばかりでした。
会社務めの傍ら長年社会活動をやっておりました。平成○○年の秋、図らずも、叙勲を受け、気持ちを新たに、さらに頑張って行こうと、思っていた矢先どうも左側の目が霧視の様な感じが有り、近くの眼科医を訪ねて診て戴いた所、角膜に浮腫があり移植以外にこれを治す方法は無い、との事でした。

山口大学病院角膜専門の担当の先生に紹介状を書くので受診する様にと指示を受け、早速、紹介状を持ち山口大学病院へ受診に訪れました。数々の機械の検査を受けたのち、担当の先生の診察を受けました。先生から現在の眼の状況を詳しく説明され、今後の治療方針も詳しく説明を受けました。

私の病状は、角膜内皮の細胞の数が激減して細胞がうまく働かず房水が溜まり浮腫になっている、此の侭放置すると早晩見えなくなる、アイバンクに登録してはやく手術する様勧められました。私はすぐに決意をして全てを先生にお任せをしました。それから約半年後、角膜内皮移植術をうけました。術後二ヶ月くらいでかなり見える様になり、半年後の視力検査では○.五くらいまで見える様になりました。これも一重に眼を提供して戴いたドナーとご遺族の方々の温かい思いとご理解の賜物と日々感謝の気持ちで一杯です。

こうして失いかけた眼に明かりを点して戴いたドナーと、ご遺族の方々、また素晴らしいドクターと大学病院の優しい看護師さんに巡り合えた事は私にとって幸運であったと思って居ります。日々感謝をしながらこの御恩に報いる為にも、今後共社会に貢献出来る様尽くして行きたいと思っております。

合掌

ただただお礼が言いたくて。

献眼移植者ご家族

主人の眼に不調が現れたのは昭和57年ごろでした。九大・産医大など行きましたが、原因不明とのことでした。

山大で両膠様滴状角膜ジストロフィーの病気との診断を受け、角膜移植をしてもらいました。当初、西田先生、近間先生、森重先生と諸先生のおかげで左右4回の移植を受けました。手術後の結果はいいのですが、糖尿病が少しあるのと農家の重労働で無理があったのかもしれません。

○昨年○月、○年○月と続けて手術をしていただきました。子供が家業を手伝ってくれてますので、今度こそ無理せず、体を大切に気をつけて生活してほしいと思います。

献眼していただいた皆様には本当に感謝しております。

これからもよろしくお願いします。

献眼移植者

私は平成十四年十二月の暮に突然緑内障になり、すぐ、レーザー手術を受けました。

以来、治療に通院しておりました。それからしばらくしてから角膜がめくれ落ちて目が痛くて痛くてその度に治療してもらっていました。それを何ヶ月間か繰り返しました。

そして、私は平成○○年、角膜の移植手術を初めて受けました。それ以来、今までに四回移植手術を受けました。お陰様で私は失明せずに正確に見る事が出来てとても幸せております。

手術を受ける度に献眼して下さったお方とご遺族の皆様の、人を思いやる勇気ある優しいお気持ちに心から有難く感謝しております。本当にありがとうございます。

まだこれから先、命ある限り移植手術を受けることになると思いますが何卒よろしくお願い申し上げます。

双眸（そうぼう）

献眼移植者

“献眼者から戴いた角膜の有難くて”
“親からもらった角膜の愛しくて”

この題目としました。実は私、昭和5年生まれで学生の時過酷な労働奉仕の為角膜を患い全盲となり、田舎の病院で博士号を持っておられる先生から「きっと治してやる」のお言葉を信じて1年十ヶ月の入院生活を送りました。その間終戦になり十歳の身には辛い試練でしたが治療に専念したお陰で見えるようになりその嬉しかったこと‥‥「奇蹟の存在だ」と先生も喜ばれ自慢の患者となりとても可愛がっていただきました。お陰さまで人並みに結婚をして娘二人にも恵まれ生活の糧の編物やパッチワークも作って楽しみました。そして私が47歳の時主人が亡くなり、それから10年弱ホームヘルパーの仕事もいたしました。その間眼科に行った事はありませんでしたが70代になり見えづらくなったので眼科で診て頂き角膜を移植しないと白内障の手術が出来ない事を知り大学病院で移植のお願いしまして順番を待ちました。平成○○年○月右目の手術を受けました。覚悟はしていましたが不安でいっぱいでしたが、主治医の山田先生他の皆様の親切に救われました。入院中の或る日同室のＡさんに「もしかして俳句をなさるのでは。」と聞きますと、「私はもっぱら川柳です。」と答えられて「私は俳句の方です。」とそれから意気投合して句作り談議の毎日で思い出深い入院生活でした。

出会いとは別れるための蛍の夜　白葉それから○年目になりました。年1回の予約日に主治医の山田先生とお会いして近況を報告しております。今年の予約日に先生から「右目はきれいです。左目が見えないでしょうからいつでもバンクしてあげますよ。」と有難いお言葉でしたが八十路に入りいまだ思案中の処です。色々の人生でしたがこの齢までを生かされ幸せ者だと思っております。そして、この度の原稿依頼を頂き改めて献眼者の感謝を申し上げましてこの稿を閉じます。

感謝しながら生きています。

献眼移植者

遺族の皆様には本当にありがとうございました。

私は、平成〇〇年〇月、山口大学附属病院で角膜移植の手術をしていただきました。

平成十二年春頃から、左目が少しずつ見えづらくなって来ました。近くの眼科で診てもらいましたが、原因がわからず、だんだん見えなくなって来ました。紹介状を持って近くの大きな病院で色々検査しましたが、やはり原因はわからないとの事で不安は募るばかりでした。

病院を変えてみたらと友人のアドバイスでやっと決心をして、福岡で大きな眼科病院に行きそこで、月に一度、山口大学病院から見えている西田教授に診ていただく事が出来ました。診察が終わるとすぐに「角膜移植しかありませんね。」とおっしゃいましたが、今までの不安が消えホッ！としたと同時にすぐには決心がつきませんでした。

「そのうちに痛みが出てきますヨ。」と言われましたが、その時はまだピンと来ていませんでした。平成十三年一月十四日の夜、急に左目に痛みを感じ、翌朝すぐに病院に行きましたが、この日から目の痛みとの闘いが始まりました。

私の病名は、水疱性角膜症と云う病気で角膜に水疱が出来これが破れると痛むのです。この痛みと闘いながら仕事を続けましたが、痛みのない日が一週間のうちに一日あるかないかという状態となり、もう限界となりやっと決心して、平成〇〇年〇月に山大病院に行き手術の申し込みをしました。

そして待ちに待った平成〇〇年〇月、角膜の提供がありましたのですぐに入院して下さいとの連絡をいただきました。

二日後に入院して、いよいよ〇月〇〇日、朝十時三十分に手術室に運ばれました。何の不安もなく穏やかな気持ちでした。「終わりましたよぉ。」と先生の声が遠くから聞こえた様で「ありがとうございます」と返事をしたのを覚えています。

術後少し痛みはありましたが、痛み止めをいただく事もなく、夜はぐっすりと眠る事が出来ました。翌日、先生の診察があり、「大丈夫ですヨ。心配いりません」とおっしゃって下さいました。本当に有難くて感謝で一杯でした。朝、点眼に見えた看護師さんの顔がはっきり見えた時の感激は今もはっきり覚えています。

手術から二十一日後、無事退院となりました。前日、先生の最後の診察がありましたその時先生が「とっても良い角膜でしたので角膜を下さった方に感謝して下さいね。」とおっしゃいました。「角膜を下さった方には感謝の気持ちで一杯です。一生大切に使わせて頂きます。」と申し上げましたら、「その気持ちを忘れないで下さい。」とおっしゃって下さいました。

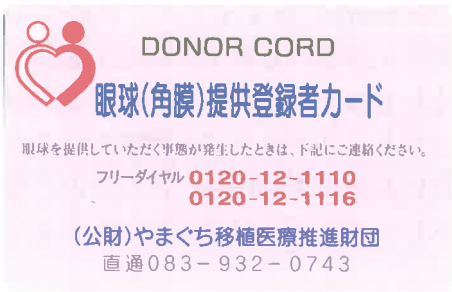
移植手術から既に十年以上たちますが、その間拒絶反応も何のトラブルもなく、私の左目に提供して下さった方の角膜が生き続けています。色々な美しい景色を見たり、仕事の為の譜面を見るために頑張ってくれています。

私に再び光を下さった方はもちろんの事、手術をして下さった西田教授、森重先生、検査をして下さった先生、看護師さん、沢山の方の御陰様で今の私があると感謝しています。

角膜を提供して下さった方とその御家族に、直接感謝の気持ちをお伝えする事は出来ませんが、この様な機会を与えて下さいました事に感謝いたします。

これからも日々感謝しながら頑張って生きてまいります。ありがとうございます。

角膜を提供して下さった方の御冥福を心よりお祈り申し上げます。　合掌



角膜移植について

献眼移植者

ある日、犬の散歩の途中、遠くの山々を見渡すと山の稜線が白く濁って見え白内障かなと思いました。以前より眼科に緑内障で通院していましたので先生にお聞きすると、角膜が白く濁っております。「角膜移植です」ビックリ。一瞬言葉が出ませんでした。それからが大変、移植となると他の人の角膜を頂くこととなる。そして、手術後の見え方も人それぞれで5年後に又移植する場合が多いですと言われ、大変重く感じられ、決断するのに時間がかかりました。そのうち検査も終わり手術となりました。手術後眼帯を外すと光りがぼんやりと見えた時の嬉しかった事、それから日増しに見えるようになり普通の生活に戻れました。角膜を頂き手術してくださった事、大変嬉しく感謝しております。そして少しでも早く角膜再生の手術が出来るようになればと思います。

生きてきた証

献眼・献腎者ご遺族

息子の角膜と腎臓が病気で苦しんでおられる四人の方々に移植され元気に生活されていると聞き、臓器提供でどなたかの役に立てた事を本当に嬉しく思いました。

色々な事が重なって臓器提供につながりました。

息子の思いのようでした。

私にとって息子の臓器提供は息子の生きてきた証しであり、誇りです。

山口大学附属病院の方々、やまぐち移植医療推進財団の方々、そして何よりも息子と臓器移植を受けられた四人の方々に、心よりお礼を申し上げます。

ありがとうございました。

尊い決断に感謝の日々

献腎移植者

自分では、全く健康を疑わなかったのに、深夜１～２時帰りのハードな仕事が続いたせいか、35歳の時に職場検診で初めて尿に蛋白が検出されました。直ぐに病院を受診し、治療に取り掛かったにも拘わらず、一向に改善せず、44歳で人工透析を受けることになりました。

仕事は辞められないため、医師と相談して、病院にかからず、自分でも行える腹膜透析を選択するとともに、一縷の望みを託して腎バンクに登録しました。

それから、毎日１日４回の透析バッグの交換が始まり、食事や水分は制限され、常に透析の時間を気にする、不自由な生活を送るようになりました。最初の頃はよかった血圧も、年数とともに上昇し、180～200mmHgになりました。貧血もひどくなり、階段を上がるのも辛く、何度か輸血をして体調を維持してきました。また、免疫力の低下により両目がサイトメガロウイル網膜炎にそれぞれ罹かり、特に右目は失明は免れたものの、視力は極端に低下し、歪んで一部見えなくなりました。

腹膜透析の開始から約10年が経過し、「この方法も限界かな」と思っていた頃、夜遅く突然、病院から連絡があり、待ち続けた腎移植をようやく受けることができました。

移植によって新しい命をいただき、これまで抱いていた将来への不安は消え、日常生活の制約も殆どなくなりました。そして、今は、普通の生活を送ることができる幸せを改めて実感してます。

腎臓を提供してくいただいたドナーの方と尊い決断をされたご家族の皆様に心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

また、私は、今回の腎移植を受けた貴重な体験をできるだけ多くの人に知っていただきたいと思っています。私の周りでも、話を聞いて、臓器提供に関心を持ち、新たに意思表示カードを持つ人も出てきました。

いくら感謝してもしきれませんが、私は、ドナーの方やご家族の皆様のことを何時も胸に抱いて、これからの人生を一日でも長く大切に生きていきたいと考えています。

角膜移植に感謝

献眼移植者

私は平成○○年○月に右目の角膜移植を受けました。角膜移植を受けるようになった原因は、網膜剥離で何度も手術をした結果角膜にも影響が出て移植が必要となりました。

もしかすると右目が見えなくなるのではと思った日々の事は今でも忘れられません。

角膜移植が決まっても、果たして提供して下さるドナーの方がいるのかと大変心配していました。幸運にもドナーの方が見つかり、無事角膜移植が成功しました。○年たった今も定期的に通院はしていますが、幸せな生活を送っている私は、ドナーの方の分までしっかり生きていかなければいけません。私は存じ上げないその方に、心の底から感謝しております。

妻は自分の目は大事に使って、角膜移植のドナーになる手続きをしました。私は今を大切にします。家族を大切にします。又、社会にも貢献して行きたいと思います。

最後に、角膜を下さった方、本当に有り難うございました。

返信用のはがきにもコメントをいただきました。

◆ 献眼をされた方のご遺族から

- 平成○○年○月、母は角膜提供をさせていただき感謝状を頂戴して恐縮しました。小生と妻も献眼登録しておりますのでその時は必ず行います。子供たちにも依頼しています。
- 医療関係者が率先して趣旨に賛同され、協力しておられることに敬意を表します。私も妻も一緒に死後の全臓器にサインしています。

◆ 角膜移植を受けられた方(ご家族)から

- 献眼ありがとうございました。合同慰霊式には参列できませんが、心より合掌しています。
- 角膜を移植していただきありがとうございました。参列できず申し訳ありません。
- ○年秋に角膜移植をしました。左目がすごく痛み、右目は見えませんが少しでも痛みが取れたので大変喜んでいます。角膜をくださった方や森重先生に本当に感謝しています。ありがとうございます。
- 残念ながら都合上参列できないのですが、毎日、感謝の気持ちを忘れずに過ごしております。
- 移植の折には母が大変お世話になりありがとうございました。体調があまりよくないので参列できません。申し訳ありません。
- 参列したいのですが遠くに帰るのが不安で参列ができないので申し訳ありません。目は順調でよく見えます。ありがとうございます。
- 角膜を提供いただいたお礼をと思っておりましたが、足が悪く参列することができません。
- 夫が病気のため参列できません。角膜移植のおかげでどうにか元気です。感謝しています。
- 参列したいのですが、90歳の年齢です。失礼させていただきます。
- すみません。移植を受けた本人は6年前に死亡しました。
- ドナー様のお陰で何とか自分のことは手探りでやっておりますが、食事、洗濯、その他もろもろは嫁さんの世話になって生活しております。森重先生によろしくお伝えください。
- 献眼された方へ　ありがとうございます。
  母は角膜の移植をしていただきまして「人生が、世の中がとても明るくなった。」と、とても喜んで生活していましたが、今年1月に他界しました。お世話になりました。心よりお礼申し上げます。
- 私は角膜移植を受けた者です。角膜提供者、ご遺族の方への感謝の気持ちでいっぱいです。献眼・献腎をご承諾いただいたご遺族の気持ちを思うとき、心が痛みます。厚くお礼申し上げ、心から感謝申し上げます。

公益財団法人やまぐち移植医療推進財団設立20周年記念感謝状を贈呈

本財団設立20周年を記念して、長年に亘り多大な貢献を賜りました次の1個人4団体にそのご貢献を讃えるために感謝状を贈呈しました。これからも引き続き、移植医療の普及・推進のために本財団へのご支援並びにご協力についてよろしくお願い申し上げます。

個人　名和田　勝 様（現・山陽ライオンズクラブ献眼特別推進委員）

内容　山口県アイバンクの設立に偉大な貢献をされた故名和田豊氏（伯父）の薫陶を受け、昭和57年頃から献眼運動を始める。昭和60年3月山陽ライオンズクラブ入会後は、地域の会長やライオンズクラブ国際協会336－D地区キャビネットの地区幹事保健福祉環境保全委員長に就任する。献眼は、提供者の善意とご家族の勇気ある決断に基づくものであるという基本理念を基づきながら、20年以上に亘り、一貫して献眼運動に取り組んでいる。現在、山陽ライオンズクラブ献眼特別推進委員とともに地域内の医療施設の医師へ理解を求める献眼ローラー作戦を実施している。自らも母親の献眼を行い、同クラブは現在までに献眼者が25名に上り、名和田氏はその中心となっている。

団体１　新南陽若山ライオンズクラブ 様（周南市　会長：小野稔　平成2年設立　会員数22名）

内容　平成2年の設立当時に会員全員が献眼登録を行い、献眼登録に関して専門知識を有する「献眼登録推進委員」を設置して献眼活動を会の中心に据えている。今年23回目を迎え地域内で親しまれている「アイバンク募金チャリティショー」で、献眼登録の呼びかけや登録会を実施する等、地域において息の長い普及啓発活動に取り組んでいる。献眼登録者は累計1,100名を上回り、6名が献眼を行っている。また、財団法人やまぐち角膜・腎臓等複合バンクの設立にあたっては資金面を含め、精力的な支援活動を行った。チャリティショーの収益金を毎回アイバンクに寄附しており、その額は現在までに9,050,917円に上っている。平成24年度からは、健康福祉委員長が当財団の評議員に就任している。

団体２　メスキュード医療安全基金 様（大阪市　代表：永田紘文　平成14年設立　協力会社17社）

内容　昭和55年代に発生した注射器の不法投棄や医療機関内での針刺し事故を解決するために、共英製鋼㈱山口事業所が開発した医療廃棄物を安全に処理するメスキュードシステムが、医療機関に評価され、現在では全国の病院で採用されている。共英製鋼㈱はメスキュードシステムの開始から17年を迎え、医療廃棄物の適正処理だけでなく医療活動とその発展に貢献したいという目的で、平成14年に「メスキュード医療安全基金」を設立する。同基金は、メスキュードシステム事業に関係する収集運搬会社・中間処理会社・従業員の賛同を得て取扱量に応じて積み立てた積立金の中から、当財団に7年間で合計650万円の寄附を行っている。本財団は受けた寄附金を移植医療通信32,000部及びその送料に充て、県内一円に配布し普及啓発を行っており、ここ数年献眼・献腎数が増加していることも効果につながっている。

団体３　山口大学医学部附属病院眼科（宇部市　代表：園田康平　構成12人）

内容　平成5年、当財団の設立と同時に、アイバンクの摘出医師医派遣要請に基づいて、亡くなられた方から提供される眼球の摘出を、眼科で一手に引き受けて医師を派遣している。眼球摘出は、大学病院の本来の診療業務とは全く異なる業務であるが、深夜の要請であっても全ての提供情報に即応し、摘出医を現地に派遣している。また、眼球提供の場合は、医師の負担や不便が多い自宅や葬祭場での摘出に快く応じる等、提供する側に配意した摘出に快く応じている。さらに、若い医師を現地に帯同し摘出手技の伝達を行うなど後継者の育成や摘出医不足を解消するために関連病院における眼科医の協力体制の整備にも取り組んでいる。セミナーや講演会の講師等の普及啓発活動も積極的に引き受けている。

団体４　山口県腎臓移植のための腎臓摘出チーム（宇部市　代表：上領頼啓　構成10 ～ 12人）

内容　平成5年、当財団の設立と同時に、亡くなられた方からの腎臓摘出チームを編成し、県内で提供される全ての腎臓摘出に関わっている。摘出に際しては、摘出現場で10日を超える待機もある中で、チーム員全員が平常勤務を続けながら交代で摘出の時を待つこともある。このように厳しい状況にあっても、提供された腎臓は全て無事に一日千秋の思いで移植を待つ患者さんに移植されて生きる力を与えている。平成24年には、脳死症例に関して経験豊富な医師を招聘し、豚（3匹）を使った脳死下からの提供を想定した腎臓の摘出手技講習会を実施している。山口県では未だ症例がない脳死下提供からの摘出手技を学ぶ機会を設ける等、提供があった場合に一歩も引けない状況の中で、他の臓器を摘出する経験豊富な医師と同等の力量が発揮出来るよう、手技の向上と後継者の育成にも積極的に取り組んでいる。

編集後記　本財団の会務、諸事業の企画・実施、アイバンクコーディネーターとして3足の草鞋を履いてどうにか6年目を迎えました。念願でした献眼・賢腎を賜りました御霊とそのご遺族様への慰霊式を挙行することができて、漸く、肩の荷が軽くなったような思いです。本号は、ご遺族様の思いと移植者の感謝のお言葉をお伝えしたく全員に寄稿をお願いし、ご寄稿頂いた全ての文章を掲載する特集号といたしました。　小野村筆